

第三十七期スクーリング講義録(ダイジェスト版)

大乘仏教の起源と仏菩薩

東洋大学名誉教授 渡辺章悟 先生



はじめに

今年は大乗仏教の仏・菩薩というテーマを掲げました。なぜかという大乗の仏には多様な仏格があり、そして、その仏になる前の存在が菩薩です。したがって、菩薩にも多種多様な菩薩が知られているわけです。大乗というのは、いわばこの仏・菩薩を中心とする新しい仏教運動なのです。しかし、この問題を考える際にはその歴史的背景を考えなければいけません。そこで最初到大乗仏教の起源としての歴史的背景から話しておし、最後に仏・菩薩の問題について考えてみたいと思います。

なお、菩薩運動が起こるにはブツダ観の変容が前提になっています。初期仏教の限定されたブツダ観から大乘仏教では弥勒や薬師や大日如来をはじめとして、多くの仏陀がおられます。もちろん多くの仏陀がいるということは、仏陀になる前の存在、つまり多くの菩薩がいるということです。

たとえば日本仏教の信仰は八幡大菩薩とか、あるいは生きている歴史的な祖師、行基菩薩、興正菩薩(叡尊)、日蓮大菩薩などというように、多くの祖師たちも菩薩として加えます。それは日本仏教

特有のあり方ですが、実はその考え方は、菩薩の定義を考えますと、必ずしも荒唐無稽なこととは言えないのです。そういうようなお話も今日はしてみたいと思います。

一、大乘仏教の時代的背景

大乘仏教後期時代の時代背景をまとめると以下のようになります。

- (一) 北インドのクシャン朝の特色
 - ① イラン系遊牧民族、② 広大な領土、③ 多民族国家、④ カニシカ王の治世と仏教
- (二) 南インドのアンドラ王朝の海上交易と国際化
華嚴経の描く世界と文殊菩薩、アマラーヴァティー大塔
- (三) 大乘仏教が興起した頃のインドは、南北を問わず、史上まれに見る国際的な時代だった。
↓ 他土仏世界、多仏思想

大乘仏教興起時代の時代的背景から、大乘はいつぐらいから始まったのか、そしてそれはどのような特徴を持っているのかを少しお話ししたいと思います。大乘仏教の起こった時代というのは、

解説書によって違いますが、最新の研究では、たいたい紀元前後です。多くは紀元後一世紀くらいと書いてありますが、その説は古い。近年の写本研究で、回収された大乘経典のガンダーラ写本の炭素含有率などを測定した結果、それが紀元後すぐに書かれたというのが分かっているのです。するとその大乘経典、それは現存のサンスクリットにもありませんし、漢訳や、チベット語訳にも対応する経典はありませんが、その内容には大乘の阿閼仏が描かれています。するとそれが書かれる以前に既に大乘の教えは確立していたと推定されますので、紀元前一世紀くらいには大乘の素形が成立していたであろうと考えられています。この写本が書かれたのが北インドでクシャン朝が起りつつあった時代です。

北インドでイラン系の遊牧民族、クシャン族と言われていますが、この民族は中国では月支(氏)と呼ばれています。そのクシャン族が支配したのがクシャン帝国であり、シルクロードから今のアフガニスタンに至る地域を領有していたわけです。その都はクシャン朝の一番西北、東にあったガンダーラというところです。ガンダーラは時代によってカシミール地方もガンダーラに含まれることもあるし、西北インドの広い地域をガンダーラということもあり、そう簡単には特定できない場所なのですが、そのガンダーラに都があつて、その領土内にはインド系の住民だけではなくて、支配階級であるクシャン族、それから同じイラン系で、このクシャン族よりもっと早く、この領土内に入っていたバルティア人やサカ族も居住していましたし、ギリシャ系の人々も住んでいました。このような多民族が入り混じる国際的な国家なのでした。

また、大乘仏教が興起した頃のインドは、南北を問わず交易の中心地でした。クシャン朝の都ペシャワールは、中国から隊商がアフガニスタンを通過して西側に至る交易の中心地でした。一方、中部インドのアンドラ王朝は海のシルクロードと言われる海上貿易の拠点国家だったのです。有名な『ミリンダ王の問い』は、中国との海上交易について言及していますし、『アルタシャーストラ』（実利論）は、中国の絹について触れています。このように、インドはまさに史上稀に見る国際的な時代だったのです。クシャン朝については後述いたします。

二、海のシルクロードと仏教の広がり

この時代は西側とはローマをはじめとする交易が盛んになります。当時の往来は、初めは行きも帰りも陸路でしたが、しだいに海路での交易も盛んになります。これを、近年では海のシルクロードと言っているのです。これを經由して仏教は世界中、特に東に広がっていったというわけです。

例えば四大翻訳家の中で中央アジアのクチャ出身の羅什は別として、往復陸路を使っただけです。法顕は、行きは陸路で行って、帰りは海路ですし、義浄は往復海路です。このように、しだいに海路が盛んになったのです。

今、海路と言いましたが、南海のインドネシアも完全な仏教国でした。そもそもインドネシアは「インドの島々」を語源とするように、古代からインドの影響が強かったのです。この国には世界最大の仏教遺産であるボルドゥールも建てられているように、紀元前からインド文化の影響が

及んでいました。少し後代になりますが、七世紀の後半から十世紀の前半にかけては、中部ジャワ地方一帯に、ヒンドゥー教と大乘仏教とを基調とする宗教美術が栄えたのです。先ほどの法顕も海路で帰国の途中、四一四年に耶婆提国（ジャワ島）に立ち寄ったことが知られています。このようにインドネシアも仏教国の時代があったのです。現在のインドネシアには遺跡だけではなく、仏教の寺院もあります。それからシンガポールの辺りも、もちろん中華系のマンダリンという人たちが仏教を崇拝していきまして、彼らの拠り所となる仏教寺院があります。

また、インド中部のアンドラ地方は、サータヴァーハナという王朝（紀元前三世紀〜紀元後三世紀）の時代で、歴代の王様はサータヴァーハナと名乗りました。そのためなかなか時代の測定が難しいのですが、このサータヴァーハナ王朝の頃で一番有名なのは王宮の人々と交流のあった龍樹（龍樹）です。龍樹はナーガールジュナといいますが、日本仏教では八宗の祖師と言われているように、すべての仏教の祖師とも言われ、真言宗でも龍樹（龍猛）を含めた八宗の祖師が描かれた掛け軸を本尊として使ったり、壁画などに描いたりしています。このように、すべての祖師がナーガールジュナから発生したという伝承があるのです。そのナーガールジュナは南インドの出身ですが、三世紀頃のサータヴァーハナ王ガウタミプトラと書簡のやりとりをしていました。それが現在、サンスクリットやチベット語に残っているのです。このころのサータヴァーハナ王朝は、中部インドを支配していましたが、海上交易が盛んで、すでにローマと交易していたので、ローマの貨幣がたくさん回収されています。港周辺ばかりでなく、

クリシュナ川やゴダーヴァリ川などの大きな川に沿って船も入り、内陸でも貿易港があったのです。当時インドの宝石、香料、胡椒やサフランは重要な貿易品目でした。また、インド南部のクリシュナ川下流にはアマラーヴァティーという有名な場所がありますが、そこはまさに交易の証拠を示す遺跡です。

ここを十八世紀後半に訪れたイギリスのマッケンジーが発見し、十九世紀後半にイギリスの考古学者バージェスが発掘し、近年はインド考古局が調査しました。その結果、最初の塔は紀元前二百年ごろ建立され、紀元後百五十年ごろナーガールジュナ（龍樹）が増築し、二百五十年ごろ完成したとされます。直径五十メートルの基壇上に覆鉢をのせ、四方の造り出し部分に各五本ずつ列柱（アーヤカ）を並べ、外側の欄楯にはジャータカや仏伝の彫刻がありました。しかし、一三三三年にイスラム軍によって破壊され、その後は、欧米の人たちが行って、建造物を故国に運んでしまいました。それだけではなく、地元の人たちも遺跡の一部を持ち出して、ついにはなくなってしまうのです。現在、当地には基盤のマウンドだけが残り、彼らの奪ったものがロンドンの博物館にストックされ、展示されています。

そのアマラーヴァティーにあった巨大なストウパーが、『華嚴経』の中に書かれる大塔と推定されています。皆さん『華嚴経』は知らなくても、東海道五十三次を聞いたことがあるでしょう。五十三次というのは、『華嚴経』の「入法界品」という章で、善財童子という方が、自分の真の師を訪ねて、五十三人の師匠を経巡っているいろいろな教えを請うのです。それに基づいて作られたのが日本の五十三次なのです。そこに出てくるのは、『華嚴

経』の描く世界と、文殊菩薩の教えによって善財童子が各地を巡るわけですけれども、その中に出てくる文殊菩薩がとどまっていた南インドの福城（ダーニヤーカー）の大塔廟とあるのが、アマラーヴァティーの大塔だろうと推定されているのです。

海上交易の実際については、そのローマの皇帝との交信が残っています。紀元前二十年にはローマのアウグストゥス帝が、マドウライのパーンドヤ王から公使を受け入れたという記録があります。もちろん小さな塔はたくさんありますが、こういう巨大な塔が、インドにはいくつか残っています。このアマラーヴァティーの大塔は、権力者たちがローマと交流して、おそらくローマの非常に優れた建築術を参考にして建てたもので、その設計図も残されているのです。今でもローマとの交信するのは大変でしょうけど、当時の海上交通はそのくらい盛んだったのです。

例えば、紅の海という紅海、かつてはギリシャ語でエリュトウラー海（南海）と言われていたのですが、このエリュトウラー海を航海するのは大概ギリシャ人の船員だったのです。その船員たちがエリュトウラー海を通って偏西風に乗ってインドに行ったのですが、その記録が紀元一世紀の半ばに無名の商人が記録した『エリュトラ海案内記』として残っています。また、北西インドの遺跡などでもローマの双頭の鷲が描かれていたり、ヘラクレスが仏陀の背後を守護していたりするのを見て、その時代は、今にも勝る史上空前の国際化の時代だったということがわかります。そして、そのような背景から大乘仏教は他方世界を説くようになるのです。これが今日の一つの大きなテーマです。

三、大乘仏教における世界観の展開

私たちの住んでいるこの世界、シャバ（娑婆）のことを、ある人々は「早くシャバに出たい」などと言いますね。これは、サンスクリット語ではサハーといい、このサハーを娑婆と翻訳したものです。その意味は、苦しみのある忍耐の世界です。その娑婆世界にお釈迦さんが登場します。お釈迦さんが修行して悟ったというこの世界の他にも、たくさん同じような世界がある。それはちょうど地球があつて、地球の周りに太陽系がある。そして太陽系を含んだ、銀河系や、もっと大きな天体があつたりします。このように宇宙には巨大な広がりがある。それと同じような重層的な世界観というのをインド人も考えるようになっていったのです。

世界というのはこの娑婆世界だけではない、娑婆世界以外にも東西南北、そして東西南北の間に東北、東南、南、南西、西、西北、そして北と、これらを全部合わせるといくつになりますか？ 四方八方ではないですか、東西南北が四、その東南、西南、西北、東北の中間世界である四維といわれる中間世界を合わせると八方になる。それが四方八方です。そればかりではない。この八方に上下の世界を加えると十方になります。さらに時間的には過去から現在へ、現在から未来へと流れていくということ、これを三世と言うでしょう。これらをあわせて三世十方の世界と言うのです。時間的空間的にすべての世界という意味です。仏教で大乘の経典を読誦する時、必ず三世十方と言います。これは、こうした大乘仏教の世界観を背景にした言い方なのです。

また、時間的にも空間的にも様々な世界があるのと同じように、それらの世界では娑婆世界と同じく多くの仏陀が弟子たちに教えを説いているとします。仏の教え、仏国土、そこに多くの世界があり、そこにも釈迦牟尼仏と同じように、いろいろな仏陀が様々な救いの教えを多くの対告衆に説法している。そのようにいろいろな種類の教えをまとめて編纂したのが大乘経典なのです。これが大乘仏教の他方仏国土の世界と多仏思想であり、大乘の多様性になっているのです。

四、中央アジアとクシャーン朝

現在の中央アジアにウズベキスタンとか、タジキスタン、トルクメニスタン、アフガニスタンとかいうように、スタンがつく国々があります。このスタンというのは、実はサンスクリットで、スターナつまり国という意味なのです。ですから、こういったところはサンスクリットの影響下にあるのです。実は中央アジアの一部、アフガニスタン、パキスタンというところはかつてのインドで、ガンダーラという国でもありました。このように、広い意味での歴史的インドと、現在の国境でいうインドとはかなりずれているのです。これを念頭においてインドというのを考えてください。ここでのクシャーン朝と言っても、インドではなくて、こちらも含めた北西インドなのです。

その次に、紀元前一世紀の版図にあるように、中国はいつも北方民族と戦っていました。匈奴という遊牧民が侵入する。秦の時代に始皇帝が万里の長城を作ったとかと言いますが、それ以前から少しずつ建てられていたものを改修し拡大した



漢の武帝が河西回廊を防衛する目的で建設した陽関の跡

にすぎません。いつも北方民族と戦っていたわけです。次に大月支（氏）に注目していたのだと思います。大月支はモンゴル高原の西にいましたが、匈奴に追われて中央アジア、アフガニスタンへと逃れていったのです。その中で、ギリシャ系のバクトリア王国を倒しました。

ただし、この時代のインドはまだ統一王朝がありませんでした。月支が西に移動していたころ、紀元前には広大なユーラシアに居住していた騎馬遊牧民族がいて、彼らも月支に圧迫されて次第に南下します。この民族をペルシア人はサカ、ギリシャ人はスキタイとよんでいました。このサカ（スキタイ）族もイラン系言語を話すインド・ヨーロッパ語族に属し、月支と近い民族で、中国では塞と呼んでいた。そしてユーラシアの西側ではローマが少しずつ強大になってくる。さらに有力なのはローマと戦っていたバルティア（安息）で、これが世界史の中では非常に大きな地位を占めて

いました。このバルティアがクシャーン朝と接するようになります。この時代に先ほどの月支の一部族がクシャーン朝を作ったのです。クシャーン朝は匈奴と同じように遊牧民です。こういう民族が北方、北西インドを支配していったということなのです。クシャーン朝もこの時代に起こったということをまず押さえておきます。

紀元前後、大乘仏教もこの時代に起こっています。インドではクシャーン朝とアンドラ朝、この二つが有力でした。紀元二世紀になると、クシャーン朝がさらに大きくなります。皆さんは長靴を履いている遊牧民の王の図像を教科書で見たことがあるでしょう。彼はカニシカ王と言われています。カニシカ王はクシャーン朝の三代目の王で、一二九年から一五二年に在位し、国土は非常に安定した時代となり、大乘仏教も栄えたと言われます。

また、北西インドからこのカニシカ王の銀貨が発見されていますが、このコインの表にはギリ

シャ文字でカニシカ、王の中の王とあり、裏にはギリシャの神で太陽神ヘリオスが刻まれています。この国にはギリシャ人もいますから、かれらの神格をコインに使っていたわけです。そして時にはブッド（仏陀）とその像が刻まれているコインも作られていました。このことから、彼は仏教を守護したといわれるわけです。多民族国家ですから、このような政策を持ったないう国は治まりません。そういう背景の中から大乘仏教はうまれたのです。

五、大乘仏教のアウトライン

（一）大乘という呼び名

大乘とはマハーヤーナ（mahāyāna）、「偉大な乗り物」という意味ですが、これは悟りという目的に至るための教えを喻えて言ったものです。この語は般若経などの初期大乘経典に見えますが、大乘でも当初は経典の名前としては用いられませんでした。初期仏教で仏が説いた教法を内容・形式によつて分類したものに、九分教、十二分教があります。このなかに方広（毘仏略）という区分があつて、これが大乘経典のもととなる初期の表現と考えられています。

この方広とは、パリー語でヴェーダツラ（vedalla）、サンスクリット語でヴァイプルヤ（vaipulya）といわれますが、もともと別の起源を持つのです。ヴェーダツラ（vedalla）という分類は、「他とは異なる、変則的な」という意味の語で、釈尊と弟子や帝釈天（インドラ）、あるいは仏弟子と仏弟子などの間で、重層的に質問を繰り返す教理問答のことです。これがヴェートウツラ（vetulla）と転化し、異端のセクト、やがて大乘を指すようになったのです。

一方、大乘を意味するガンダーラ語としては、ヴェーヴツラ（vevulla 遺曰羅）、あるいはヴェーウツラ（veulla 惟曰羅）が用いられ、これらの語からサンスクリット化してヴァイトウルヤ（vaṇḍhya 方等）、さらにヴァイプルヤ（vaipulya 方廣）へと変わっていったとされています。いずれにしても、またマハーヤーナ（mahāyāna 大乘、摩訶衍）という言い方は広く認知されてい

かったのです。

漢訳を見ると、二世紀に支婁迦讖^{しるかせん}らによって大乘経典が翻訳されましたが、その中に先の『遺日羅（ヴェーヴツラ）』という呼び名が使われています。その後、三世紀から七世紀初頭に訳された大乘経典は「方等」と呼ばれ、五世紀頃から大乘という流れが一般的になって「大乘経」と改名されるようになっていきました。このように経典名としての大乘経は、かなり後代になってから定着したのです。

（二）大乘経典の見方

このように大乘はヴァイトウルヤとかヴァイプルヤというように変化し、マハーヤーナ（摩訶衍、大乘）に落ち着いてゆくのですが、大乘経典の中に『大方広仏華嚴経』や『大方等大雲経』、『方等泥洹経』などのように「方広〇〇経、方等〇〇経」というのはたくさんありますが、「大乘」はどうかと言いますと、初めて「大乘」という言葉を使った経典は般若経です。ただし般若経というのは固有の経典ではなく、漢訳でいうと四十数種類の般若経典群をひっくるめて、般若経と言うのです。

私は群馬県人ですから、故郷の山のことを例にあげますと、赤城山とか榛名山とかいうのを聞いたことがありますよね。しかし、一つの赤城山とか、榛名山というのはいらないのです。そういう山はない。赤城であれば、地蔵岳、鍋割山、長七郎山、黒檜山こういった複数の山を合わせて、赤城山と言っているのです。つまり、赤城山系ということですが、同じように般若経という固有の経典はないのですが、その般若系経典の中で最初に翻訳されたのが先の支婁迦讖によって翻訳された『道行般若経』です。この経典のタイトルですが、実は同類



講義を真剣に聴く

の般若経は数多くあって、相互の区別ができなかったもので、漢訳者が第一章の名前をとって経典のタイトルにしました。つまり、他の般若経と区別するために、その第一章「道行品」をとって『道行般若経』としただけなのです。原典にはない漢訳者のつけたネーミングです。この事情は他の般若経もほとんどそうなのです。もとはみな「般若（波羅蜜）経」だったのです。これもいわば般若系経典群ということですが、もとにかくありますが、この古い『道行般若経』では大乘という語は使われません。その代わりに「摩訶衍^{まかえん}」という大乘（マハーヤーナ）の音写語がつかわれていて、これが

最古の例なのです。

支婁迦讖は北西インドでクシャン朝を興した月支^{しつ}氏の出身でした。そのために支婁迦讖といいます。正しくは、ローカクシエマ（*Lokakṣema* 婁迦讖）ですが、婁迦讖の頭に月支の支をつけて支婁迦讖とするのです。同じように『維摩詰経』『大明度経』を訳した支謙や、『成具光明定意経』を訳した支曜も月氏出身です。余談ですが、最初に禅観の経典を翻訳したのは、安息（パルティア）の出身の安世高です。同じように、この国の出身者は、安玄・安法欽のように安がつきます。また、『無量寿経』の訳者として知られる康僧鎧や、『六度集経』の翻訳者康僧会などは康居（ソグド）出身なので、「康」がつくのです。このように、ほとんど頭につく言葉によって出身地がわかるのです。ともかくこのような西から中国に至った人たちが、経典を翻訳したのです。

（三）大乘の教団

初期には大乘の教団はありませんでした。碑文に依れば四世紀になってはじめて出家のメンパーである釈迦比丘や釈迦比丘尼、優れた在家者という意味の勝優婆塞（パラモパーサカ *paramopāsaka*）・勝優婆夷（パラモパーシカ *paramopāśikā*）といった肩書きが見られるようになり、大乘の共同体の存在が確認できます。また、大乘の信奉者（マハーヤーナヌヤーイン *mahāyānānyāyin*）という名が現れるのは六世紀になってからです。

（四）大乘経典の訳経僧

ところで、一般には大乘と部派は対立的に言われますが、相互排他的な関係にはありませんでし

た。なぜなら大乘經典は、大乘の草創期から伝統部派の中に流通していたのです。たとえば、最近アフガニスタンのバーミヤーン溪谷から発見されたガンダーラ写本では、大衆部（マハーサーンギカ *Mahāsāṅghika*）・説出世部（ローコーツタラヴァーディン *Lokottaravādin*）の經典や律典の他に、『八千頌般若（*Asṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*）』をはじめ、多数の大乘經典が発見されていて、これらの部派が、大乘經典を保持していたことは明らかなのです。このことを、訳経僧の記録から見てもみましょう。

法顯（三三九？～四二〇？）は、三九九年に戒律の文獻（律藏）を求めてインドに旅立ちました。彼は大衆部の律（『摩訶僧祇律』）を、大乘比丘たちが住むパターリプトラ（*Pāṭaliputra* 華氏城）の天王精舎で書写しました。このことから、大乘の人々も部派の律を伝承していたことが分かるのです。また、大乘には独自の律がありませんでした。大乘の出家者は伝統的な部派の律に従って生活していたので、必要がなかったのです。このことは別の訳経僧の報告によっても裏付けられます。海路で南海諸国を経由してインドに赴いた義淨（六三五～七二三年）は、「インドで優勢な大衆部・上座部・根本説一切有部・正量部の四派では、大乘と小乗の区分は定まっていな。大乘の菩薩を礼拝して大乘經典を読誦するのを大乘と名づけ、このことをしなければ小乗と呼ぶだけのことである」（『南海寄帰内法伝』）と報告していますが、大乘の教団には言及しません。つまり、大乘の出家者は部派の戒統を受けていて、実際に部派の内部分け、大乘の經典を読み、大乘の仏・菩薩を信仰していたのです。

しかし、すべての部派の人々が大乘を受け入

れたわけではありません。上座部の勢力が優勢だったスリランカでは、大乘を排除した大寺派（*mahāvihāra*）と大乘と上座部を兼学する無畏山寺派（*abhayaṅgīrīvihāra*）があったことを複数の歴史書で伝えています。また、玄奘（六〇二～六六四年）も、この学派のことを『大唐西域記』で伝えており、大乘を受け入れていることから大乘上座部と呼んでいます。

また、説一切有部（*sarvāstivādin*）の論書である『アビダルマディーパ』（*Abhidhamadīpa*）でも、「方等者」（*Vaṭṭika*）を、「旋火輪のように自性がないからすべての法は無我である」と説く、道理に合わない空性論者（*ayoga-sūnyatā-vādin*）等と言って厳しく批判したり、ヴァスバンドウ（世親）（四～五世紀）のことを、「有部から落ちこぼれた方等者（*vaṭṭika*）」と誹謗しています。この方等者が、方広（*vaipulya*）あるいは大乘（*mahāyāna*）を指すのは前述したとおりです。

現在、大衆部が方等経を作り、それがいわゆる大乘經典になったという説が有力ですが、その根拠は、大衆部の思想と大乘經典の思想的共通性にあります。ここでその共通する思想をあげると、大衆部と大乘は、多世界多仏、一音説法（『十地経』、『維摩経』『仏国品』）、化仏説法（『大方廣佛華嚴經』、『入楞伽經』）を説き、一方、南方上座部と説一切有部はそれらをすべて認めなかった。このような点から、大衆部が大乘のバックグラウンドになったとされるのです。ただし、法蔵部も同様の教理を説き、非常に類似した法数を説くこともあり、必ずしも断定はできません。このように大乘の起源はいまだ不明な点が多いのです。

（五）大乘仏教の起源

大乘仏教の起源やその内容を厳密に確定するのは困難が伴います。その実態はどのようなものであったかは、歴史的・地域的な相違があり一概にはいえませんが、少なくとも仏塔崇拜に端を発した経巻崇拜と深いつながりを持つていたこと、教理の上からは大衆部に類似した思想を多く持つていたことが指摘できます。おそらくは、大衆部のブツダ論、菩薩観、仏塔崇拜、修行道を核としつつ、有部等の教理を広範に取り込みながら、新たな自らの体系を構築していったのでしょう。

彼らは大乘の諸仏・諸菩薩を礼拝し、大乘經典を聖典としていたが、大乘の律藏は存在しなかったから、大乘仏教の出家者は何れかの部派の僧団で出家受戒し、部派の僧院の中で生活していたのでしょう。大乘仏教は、出家者・在家者の両者を含む集団によって信奉されていましたが、教団としての組織を形成していなかったため、独自の律は必要とされていなかったのです。大乘経論では菩薩を出家と在家の二種にわけますが、出家の菩薩とはまさにこの部派の中で大乘に心を寄せる伝統的部派の出家者たちだったのです。

なお、大乘仏教が教団化してゆくのは、碑文によれば四世紀以降です。このころになって寄進する側とそれを受ける教団に大乘の名を記した資料が現れ始まることとその根拠になります。大乘の実践は六波羅蜜で、その中の戒波羅蜜は十善であって、階位としては十地が重視されます。これらは在家も出家も共有することから判るように、この実践者が菩薩と言われたのです。

(六) ブッダと菩薩

仏教徒は亡きブッダへの憧憬や讃仰から、ブッダを次第に超人化し、神格化していきました。ブッダの偉大な生涯は仏伝文学に描かれ、さらに大乘になると、悟りに向かつて発心した者を「菩薩」と呼ぶようになります。ブッダの複数化はこのような菩薩の出現を予想しているのです。

ここでは出家者が在家者かを問わず、すべての者がブッダと同じ悟りアヌタラー・サムヤックサンボーディ (*anuttarā samyaṅsambodhi*・無上正等覺・阿耨多羅三藐三菩提) に到達することができる、その目的に向かつて発心するものをボーディサットヴァ (*bodhisattva*・菩提薩埵)、略して「菩薩」と呼びました。ボーディ (*bodhi*) とは「悟り」、サットヴァ (*sattva*) とは「衆生」という意味なので、菩薩とは「悟りを求める人」と解釈されたのです。この意味では菩薩は普通名詞です。

ただし、菩薩の語はすでにブッダの前生物語である「ジャータカ」文献で、成道する前のシャーキヤムニ・ブッダの呼び名として用いられていました。その意味ではシャーキヤムニ・ブッダが唯一である以上、菩薩は釈迦菩薩に限られていたのです。そこでは、菩薩は前世にさまざまな善行を積んで、この世でブッダとなったと説かれ、その転生を繰り返して修行を積むことによって、ブッダとなったとします。そのとき、これら複数の菩薩はシャーキヤムニの前身ではありますが、すでに複数のブッダの存在を想定していることになるわけです。

たとえば、最初期の仏典として知られる『スッタニパータ』(第八一、八五、八六、三八六、五二

三偈)でも、複数のブッダはすでに知られています。また、『法句経』(ダンマパダ)の第十四章「ブッダ」の章でもほとんど複数形で登場します。初期仏典では、弟子さえもブッダと呼ばれることがあったのです。このように、誰でも解脱してブッダになれるというのが、本来の仏教であったといえます。

それが部派仏教の時代になって、ブッダを神聖視し、特別視するようになり、その結果ブッダはシャーキヤムニ、過去の六仏(過去仏の毘婆尸仏なども、正覚以前には菩薩とされた)、未来の弥勒仏のみに限定されるようになりました。その意味で大乘はむしろ初期の仏教の考え方に近いと言えるのです。

このようにジャータカ等の讃仏文献こそが、普通名詞としての菩薩の複数化へ至る道を提供したのですが、いったん菩薩の普通名詞化が進めば、その後ブッダが普通名詞として解釈されるのに長くはかからなかったでしょう。こうしたジャータカの発達は、仏教思想の展開に大きな影響を与えたわけです。

まとめ

大乘仏教では、それまでの一仏世界から、三世十方という時間的空間的広がりを持った世界観が確立し、多方面に広がった世界が描かれています。その理由は先にクシヤン朝の時代背景でも述べた国際化、多様化にあると思います。そこで述べられたように、他方仏国土において、それぞれのブッダが説法する姿が描かれ、多くの菩薩がそれぞれのブッダの教えを聴聞し、その中には将来

ブッダになることを授記(予言)される菩薩も登場します。それは新たなブッダの誕生が告げられると同時に、次世代へと連綿として続く仏教世界の拡充をイメージしています。このようにして、シャーキヤムニ・ブッダをモデルとしたブッダ観が変化し、菩薩観も大きな展開をすることになったのです。

このように、大乘においてはだれでも菩薩になれる可能性を生みました。生きとし生けるものは悟りへの希求(菩提心)を起こすことによって菩薩となる。その発心が重視されたのです。もちろん、部派仏教時代の文献でも菩薩はすでに声聞・縁覚と並んで三乗の一つとして述べられています。そこで前生の業によって生まれた《業生の菩薩》という完全な福德を備えた存在です。これに対して大乘では、すでに成道することは確定しているが、利他の誓願をおこして、敢えてこの世に生まれた《願生の菩薩》と見なされます。このような世のため人のために実践(慈悲・利他行)し、すすんでは悟りの真理によって現実社会の浄土化(浄仏国土)に努めるという姿勢を、「上求菩提・下化衆生」といいます。これが大乘の菩薩の特性なのです。

その他、大乘経典には、観音、文殊、普賢、地藏、虚空蔵、日光、月光をはじめとして、数え切れないほど多くの固有の菩薩も登場します。大乘経典はこれらの菩薩を対論者として、慈悲にもとづく大乘の修行道によって悟りに向かうべきことを呼びかけたのです。

以上のように、大乘仏教とは菩薩道、すなわちブッダになるための道の再編成であって、その教えを様々に説く経典を提示してゆく仏教運動であったといえるでしょう。